

第4講：146 「御苦労さん」

この逸話について今回注目したいことは二つある。一つは、「宿の亭主から、「あのお方が、庄屋敷の生神様や。」とて、赤衣を召された教祖を指し示して教えられ、お道の話が聞かされた」というところである。つまり、この宿の亭主から、「にをい」をかけられることによって、教祖を知ったということである。それなくして、この逸話はなりたない。

もう一つは、教祖が佐治登喜治良に対して、「御苦労さん。」と声をかけられて、佐治は、「お声を聞いた一瞬、神々しい中にも慕わしく懐かしく、ついて行きたいような気がした。」というところである。

1. 「あのお方が、庄屋敷の生神様や」

この逸話の舞台は、明治17年春、奈良の今御門にある榎屋という旅館である。『ひながた紀行』（第2版、天理教道友社、2019年、291頁）には、「明治十七年春の御苦労の際、教祖は「榎屋」という旅館にも寄られている」とある。奈良監獄署での御苦労のあと、榎屋に寄られたことがあったようである。

この逸話によると、佐治は宿の亭主から「あのお方が、庄屋敷の生神様や」と教えられ、お道の話が聞かされた。湖東大教会から出版されている伝記『佐治登喜治良』（昭和43年）では、この時の様子が口述筆記された資料より次のように引用されている。

「其ノ際始メテ御教祖ヲ拜ス。人々ガ、「アノオ方ガ生神様ヨ、庄屋敷ノ天理王様ヨ」ト囁クノヲ聞クヤ何ノトナク敬慕ノ情禁ズル能ワズ恭シク拜礼セリ」（『佐治登喜治良』19頁）

佐治は軍隊の演習でたまたま奈良に來ただけで、教祖のことは全く知らなかったが、そのとき宿の亭主からきた「生神様」についての話は、佐治の心を強く打ったようである。

この宿の亭主は吉本という人であった。伝記『佐治登喜治良』には、榎屋について調査したときの、近所の人たちの会話が次のように記されている（『佐治登喜治良』24～25頁、但し、個人名は、仮名に変更した）。

「吉本さんは信者さんではなかったけれど、町内の有力者でもあり、仲々^{おとこぎ}侠気のあるお人やったようすわ」

と丸井歌吉（仮）の孫に当たるといふ、丸井まつ子（仮）、榎屋の前の家の吉水コメ（仮）という七十七才の婦人たちが、交々語ってくださった。

「監獄ではお水の他何んにも食べはらへなんだそうやが、平気やったんやて」

「イヤ、何んで監獄へ入れられはったの」

と、コメ女の孫娘の高校生らしいのが口を挟んだ、

「昔はみんなそうやったんや」

「イヤそらまたなんでやの」

と、孫とお婆さんのやりとりは果しが無い。

この伝記が刊行される当時には、今御門町界隈の高齢者の間にまだ教祖に関するこのような噂話が残っていた。それほどこの周辺の人々にとっても教祖の御苦労は、印象深い出来事だったようである。この会話の中で、榎屋の亭主が、「信者さんではなかったけれど、侠気のあるお人」と表現されているのは興

味深い。警察からすると教祖は要注意人物である。そんな教祖を宿に招き入れることは、いらぬトラブルを招きかねず、警察の目も気になる。それでも、信者でもないのに教祖を宿でお世話した榎屋の亭主を、地元の人々は「侠気のあるお人」と評した。それは、この地元の人々が、何度も監獄署に連れていかれる高齢の教祖（生神様）に心を寄せ、いたわしく思ったことを示している。佐治も同様に、この「生神様」に深い感銘を受けたのであった。佐治はその後地元で再びお道と出会い、「おやさの我身にお掛けくださる負託」を感じ、道に尽くすようになる。

2. 教祖による「御苦労さん」

「御苦労さん」ないし「御苦労さま」は、相手の骨折りをねぎらう言葉で、挨拶言葉ともなっている。現代では「目上の人に使うのは失礼にあたる」とされることが多い。この意味で教祖の「御苦労さん」を理解すると、「月日のやしろ」であり、高齢でもある教祖が青年に、「御苦労さん」と挨拶されたという、特に目新しいこともないお話に思われる。

しかし、「御苦労」という言葉の歴史を調べると、少し事情が異なってくる。倉持益子『「御苦労」系^{ねぎら}い言葉の変遷』（『明海日本語』第16号）によれば、「御苦労」は1970年代から上司に対して使うべきでない表現とされるようになるが、かつて（江戸期）は目上に対するねぎらいの言葉で、敬意表現であったという。

この「御苦労」の用例を踏まえると、教祖の「御苦労さん」の解釈も変わってくる。明治17年春、たまたま奈良の宿近くで通りすがった青年に、教祖は「御苦労さん」と声をかけられた。当時、年長者が若い人に、そのように声をかけられることはあまりなかったはずである。

この時の佐治青年にとっても、「生神様」とされる方が若輩の自分に「御苦労さん」と敬意を込めて声をかけられることは印象的な出来事だっただろう。ただでさえ「生神様」について宿の亭主に聞いて感銘を受けた上に、「なんと私のことを立てておねがい下さる」と驚き、さらに心を打たれたのではないだろうか。逸話では、「お声を聞いた一瞬、神々しい中にも慕わしく懐かしく、ついて行きたいような気がした」と記されている。

教祖は、誰にでも「御苦労さん」と声をかけられることが常であったそうである（『逸話篇』195話参照）。誰にでも「御苦労さん」と声をかけられたということは、どんな相手に対しても、相手を立て、その人をまるごと受け入れ、その働きを心からねぎらわれたことを表している。この一言に救われた人は大勢おられたのではないだろうか。特に苦労のなかに懸命に、日々歩んでおられた人々にとって、教祖の「御苦労さん」は、受け入れられている、認められている、ついて行きたい、との思いとともに、明日を生きる活力を与えるものであったことだろう。

この教祖の逸話から、いつもできるだけ自身の心を低くし、誰に対しても相手を立てて敬意を表し、相手を心からねぎらうという、お道を通る上での基本的な心構えを学ぶことができるのではないだろうか。